



埋蔵文化財愛知

no.55



弥生時代中期の水田

でんぼうじのだ 伝法寺野田遺跡

愛知県北西部の一宮市に所在する伝法寺野田遺跡で弥生時代中期の水田跡が検出された。水田は畔によって細かく区切られたいわゆる「小区画水田」と呼ばれるもので、微高地縁辺の緩傾斜地を利用して営まれている。当地域の弥生時代における水田経営の実態を知るうえでの貴重な発見となった（[頁に関連記事](#)）。



遺跡調査速報



でん ぼう し の だ
伝法寺野田遺跡

一宮市丹陽町伝法寺
(財)愛知県埋蔵文化財センター

伝法寺野田遺跡は一宮市の南東部、五条川によって形成された後背湿地上に位置し、元屋敷遺跡や岩倉市権現山遺跡に近接している。発掘調査は、五条川右岸流域下水道浄化センターの建設に伴う事前調査として4月から9月にかけて実施した。今回の調査では弥生時代中期の水田跡を良好な状態で検出したほか、古墳時代前期、古代・中世の遺構・遺物も確認した。

弥生時代中期の水田は微高地縁辺の緩傾斜地を利用して営まれており、近くを小河川が蛇行しながら流れている。また、微高地上で検出される遺構は希薄であることから、居住域が生産域からやや離れた集落景観を想定することができる。水田は基本的には畔によって一辺が2～5mに区切られたいわゆる小区画水田で、小河川から水を得たうえ、田越し灌漑によって給水していたものとみられる。水田面では稲株の跡や耕具の跡も確認されている。

これまで当地域の弥生時代における水田経営の実態は全く不明であったが、今回の調査成果がその実態解明に向けての第一歩を記すものとなった。（埋文セ 早野浩二）



調査区全景



水田に残る稲株の跡



み つ やま
三ツ山古墳

豊橋市牟呂町坂津 17-1 ほか
豊橋市教育委員会

三ツ山古墳は、豊川左岸の河口に近い中位段丘端部に立地し、古墳からは豊川下流域を広く見渡すことができる。

調査は、坂津地区区画整理及び公園造成事業に伴う範囲確認を目的に行ったものである。墳丘を取り囲むかたちで、墳裾を中心に9カ所のトレンチを設けた。

いずれのトレンチからも、古墳を全周する幅6.5～10mの周溝が確認された。この周溝の形態から、本来の規模は全長約35m、後円部径約18m、前方部幅25～28mを測る、前方部が発達した形態の前方後円墳と判明した。

出土遺物には円筒埴輪、須恵器（TK47併行、須恵器・埴輪とも水神古窯製品か）があり、多くは周溝内から出土している。原位置をとどめる円筒埴輪は墳丘中位の1カ所でしか確認されていないが、平坦面上にあることから段築の存在を示唆するものである。

三ツ山古墳は、5世紀末～6世紀末まで継続した渥美湾沿岸部における首長墳系列の最初の古墳である。前方部の発達した墳形や、須恵器・埴輪併焼窯である水神古窯との関係から、小規模ながら中央との関りが色濃く見られる首長墳といえるだろう。（豊橋市教育委員会 岩原 剛）



調査状況



原位置をとどめる円筒埴輪

のう み じょうあと
能見城跡

東加茂郡旭町大字榊野
(財)愛知県埋蔵文化財センター

能見城跡は、愛知県土木部による県道土岐足助線改良に伴い、平成10年5月より9月まで事前調査を行った。調査面積は2,400 m²である。本城跡は、矢作川の支流である阿摺川の上流左岸にある丘陵部先端に築かれた戦国時代（室町時代後半）の中世城館（城砦）跡である。

今回の調査により、本丸跡に見られる物見櫓痕跡と2つの曲輪跡、南側から本丸への上り口と見られる階段、江戸時代の畑の畝痕と思われる溝跡を検出した。それに伴って城の営まれた際使われた土師器小皿・皿、瀬戸美濃産天目茶碗・鉢・壺、常滑産甕、青磁碗が出土し、宋銭の「元祐通寶」、江戸時代の銅銭「寛永通寶」、瀬戸美濃産陶器も少量出土した。また、南西曲輪から3基の土抗墓を検出し、座葬された人骨が1体見つかった。本丸跡北寄り中央にあった物見櫓跡の大部分は、江戸時代における開墾により削平されたものと思われる。

本城跡のような小規模な城跡で、生活に伴う多数の遺物が出土するのは明らかな活動の痕と当時における能見城の営みの特徴づけるものであり、この地域の戦国時代を考える上で貴重な資料になった。（埋文セ 花井 伸）



物見櫓痕跡と江戸時代の畑の畝痕跡



本丸への上り口の階段

こ まき やまじょう
小牧山城

小牧市堀の内
小牧市教育委員会

調査は、『史跡小牧山整備計画』の策定にあたり、その基礎資料を得るための試掘調査で、平成10年8月から開始した。調査地点は山の東麓に位置し、城の縄張りからみると、山麓の横堀に囲まれる長大な帯曲輪にあたり、北東部と南東部の虎口部分も含まれる。

城の時期の面は、外側へ向かって緩やかに傾斜し、山麓の土塁の



土塁断ち割り状況

頂部とは、最大約3mの比高差がみられる。

城の南東部の虎口の調査では、山麓を巡る堀が虎口の中にまで入り込み、山麓を巡る土塁が堀に

沿って内側へL字形に屈曲して築かれていたことが確認された。堀は幅約11m、底面から土塁頂部までは約5.5mを測る。この虎口は、天正12年（1584）の小牧・長久手の合戦時に築かれたもので、このような強固な防御は、かつて調査した搦手口では確認されておらず、この虎口の重要性が伺える発見となった。

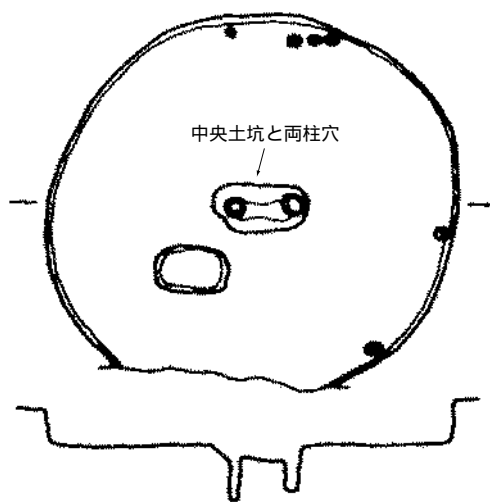
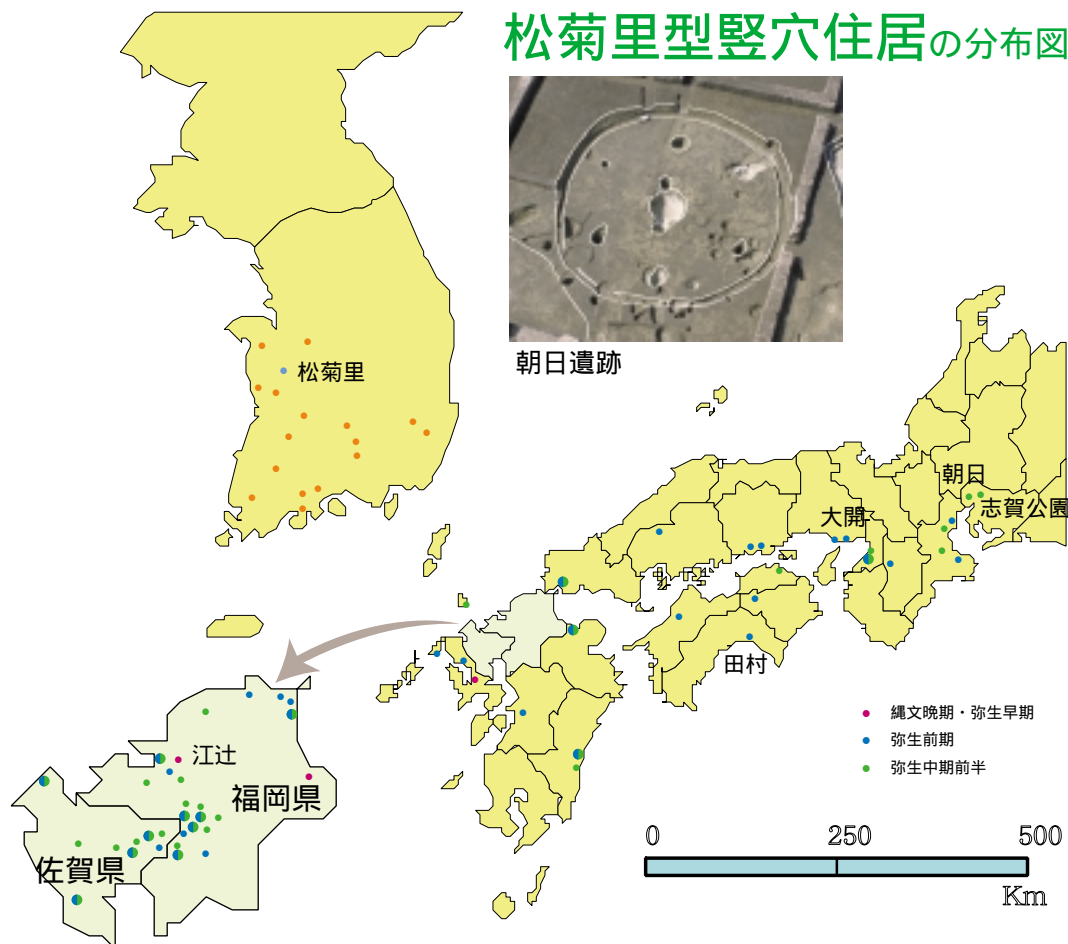
（小牧市教育委員会 坪井裕司）



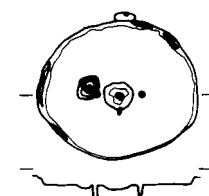
堀

しょうきくり
松菊里型（系）
たてあな
竪穴住居

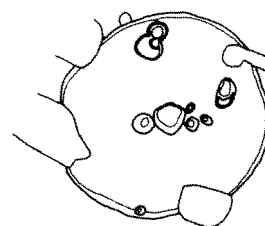
松菊里型竪穴住居の分布図



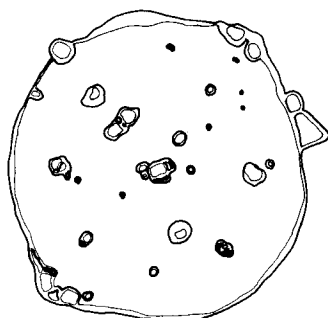
韓国・松菊里遺跡 (S = 1/100)



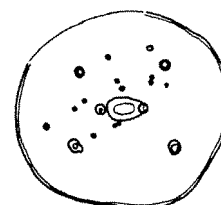
福岡県・江辻遺跡



兵庫県・大開遺跡



高知県・田村遺跡



愛知県・志賀公園遺跡

松菊里遺跡以外は S = 1/200

はじめに

弥生時代の開始と前後して、水田稲作・畑作農耕、金属器の利用といった文化が朝鮮半島から北九州地域を中心に伝わってきました。朝鮮半島からの新たな文化が西日本地域に大きな変革をもたらし、一般の人々の住む竪穴住居にも大きな変化がありました。松菊里型(系)と考古学者によって呼ばれる特徴的な竪穴住居の朝鮮半島からの伝播です。愛知県においても清洲町朝日遺跡、名古屋市志賀公園遺跡において発見されており、ここでは弥生時代開始期の「家」について考えたいと思います。

松菊里型(系)竪穴住居

松菊里型(系)竪穴住居は1985年に忠清南道松菊里遺跡において見つかった円形間取り竪穴住居を標識タイプとして中間研志氏によって提唱されました。その特徴は竪穴床面中央にある中央土坑(ピット)とその土坑両端(脇)に各1つの柱穴があることで、日本においては弥生時代の円形間取り竪穴住居のことを主にいっています。近年大韓民国考古学者により柱穴のあり方などから朝鮮半島における地域性が指摘され、日本においても多様な形が見つかりました。

分布と変遷

これまでの調査によれば、弥生時代開始期にあたる春秋戦国時代や前漢時代の中国大陸においては確認されておらず、無文土器時代の朝鮮半島や弥生時代の西日本の限られた地域に多くみられます。日本においては、太平洋側では愛知県尾張地域や長野県西南部、日本海側では新潟県や長野県長野市近辺が分布の東限になり、北海道や東北地方、関東地方では確認されていません。

左ページに示したのは弥生時代前期と中期前葉の松菊里型(系)竪穴住居が確認された遺跡の分布で

す。日本においては弥生時代前期に九州地方から東海地方西部に広がり、方形・長方形間取りの竪穴住居から松菊里型(系)竪穴住居に変化しております。弥生時代中期前葉にはさらに東の愛知県に広がりますが、北九州地方ではすでに長方形間取り竪穴住居への変化がみられ、日本海側の地域や長野県へはやや遅れて広がるようです。

起源

松菊里型(系)竪穴住居の起源は中間氏が大韓民国にある遺跡名をつけているように、朝鮮半島にその起源があると考えられています。朝鮮半島で無文土器時代前期の忠清南道休岩里遺跡のものが最も古く、日本には朝鮮半島系の遺物が比較的多く見られる遺跡において多く見つかったことが根拠です。しかし日本においても縄文時代晩期後半の福岡県松丸D遺跡においてすでに見られ、あまり時間差なく伝わったようです。

終末

松菊里型(系)竪穴住居の終末は、九州地方、四国西部地方、東海地方以東の地域では弥生時代中期後葉には方形・長方形間取り竪穴住居に戻りますが、中国地方、近畿地方では弥生時代終末期(一部の地域では古墳時代前期)まで根強く営まれます。

問題点

この松菊里型(系)竪穴住居が大韓民国・日本国両国の考古学者に注目されるのは何故でしょうか。私どもも含めて、このカタチの竪穴住居が分布やその営まれる時期などから、朝鮮半島・日本における農耕文化の開始と極めて関連の深い現象と考えられているからに他なりません。また松菊里型(系)竪穴住居のカタチが朝鮮半島や日本のそれまでの竪穴住居に比べて明らかに異なる特徴をもつことも大きな要因と思われます。

それでは松菊里型(系)竪穴住居がどうして朝鮮半島や西日本の地域に広がったのでしょうか。もちろんその理由には稲作技術や金属器利用といったより大きな背景があるように思われますが、あくまでその主たる要因は当時の建築技術や建築伝統の中に存在し、この時代の竪穴住居は竪穴住居の中で変化すると思っています。そこで注目されるのは第1の特徴としてあげた中央土坑とその両端(脇)にある柱穴の存在です。松菊里型提唱者の中間氏は当初の松菊里型(系)竪穴住居には、中央土坑の底などに平坦な石などが置かれているものがあることと土坑の両脇にある柱穴の存在から、杵などによる穀類などの脱穀などの作業を想定されているようです。また中央土坑の周りで比較的石器製作の痕と思われる石器の未製品や石くずが発見されることから中央土坑には石器製作のための土坑としての役割も想定されています。

まとめ

しかし日本においても初期のものはその通りであります。中間氏も考慮されているようにその後展開するもので中央土坑は炉としての機能が推定されており、特に日本においてはその大部分が炉としての機能を備えたものと考えた方がよいように思われます。

松菊里型(系)竪穴住居が西日本の地域に広がり、比較的根強く使われた理由は、中央土坑と土坑両端(脇)の柱穴が日本の採暖・調理の方式に適合した炉としての機能を比較的当初から合わせもった点にあるのだと想定したいと思います。

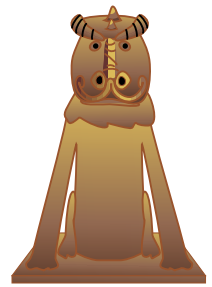
主な参考文献

中間研志 1987「松菊里型住居 - 我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究 - 」『東アジアの考古と歴史』中、岡崎 敬先生退官記念事業会

(埋文セ 蔭山誠一)



県内遺物紹介



戦国時代の都市遺跡である清洲城下町遺跡の本年度の発掘調査において
陶製の狛犬(15世紀中葉)が発見された。この狛犬は北西 - 南東方向に走
る幅7m以上の大溝のうち城下町後期(17世紀前半)を下らない時期の地層から出土した。

出土した狛犬は、上顎部から頭頂部にかけての頭部と蹲踞する右脚部と推測される部分がある。全体に鉄釉
がかかり、瞳と鼻孔が穴を穿つたちで表現され、頭頂部に角を有している。上唇部分に破損があるのでわか
りにくい。釉の残り具合から上下の唇が接し、口元は離れていたと推測される。このことからこの狛犬は呷
形であったと思われる。平成3年度
に本遺跡で出土した狛犬と比較し
て、形は端正で、ライオンの原型に
比較的近い。名古屋市の伊勝神社に
伝世する「応永廿五歳(西暦1418
年)」との墨書銘がある一対の狛犬
のうちの呷形のものに極めて類似し
ている。



狛犬正面



狛犬側面

陶磁製の狛犬は、祈願や報謝のた
めに神社に奉献するために鎌倉時代

から製作されるようになったもので、尾張・三河・美濃・飛騨の四力国を中心に分布している。庶民化し多種
多彩なものになる以前の形態を有する狛犬として注目されるものといえよう。(埋文セ 加藤博紀)

平成10年度発掘技術等研修会(Ⅰ)・研修会(Ⅱ)

県教育委員会との共催で、今年度も研修会を開催いたしました。

研修会(Ⅰ) 8月28日(金) 参加者40名

「埋蔵文化財行政の変換点」 加藤安信(調査センター)
「発掘調査実施の要件について」 赤羽一郎(県文化財課)
「出土品の取扱について」 高橋信明(県文化財課)



研修会(Ⅱ) 11月25日(水) 参加者34名

事例報告 「『駒前第1号古墳』の編集」 青木 修(瀬戸市埋蔵文化財センター)
「『市道遺跡』(Ⅰ)～(Ⅲ)の編集」 贅 元洋(豊橋市教育委員会)
「『西上免遺跡』の編集」
赤塚次郎(埋文センター)

講義 「報告書のあり方」
金子裕之(奈文研)
「報告書写真のテクニック」
井上直之(奈文研)

埋蔵文化財愛知 no.55

発行 平成10年12月28日

編集 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017

愛知県海部郡弥富町前ケ須新田野方 802-24

TEL 0567-67-4161 ~ 4163 FAX 0567-67-3054

印刷 クイックス